

WHITE PAPER 2025

討議用ドラフト



発行 京都哲学研究所

2025年9月1日

監修 (Supervisors)

出口 康夫

Markus Gabriel

統括執筆者 (Lead Author)

五十嵐 涼介

研究チーム (Research Team)

Samuel Mortimer

高木 俊一

辻 麻衣子

- 本文書は「Draft for Discussion (討議用ドラフト)」である。内容はレビューと議論に基づき改訂される。
- 本稿で提示される主要概念(*付き)は、巻末の用語集で定義をまとめている。

エグゼクティブサマリー

地政学的緊張の高まり、気候変動の加速、人工知能の急速な発展——現代社会は、相互に関連する複合的な課題に直面している。従来のアプローチでは、これらの課題への対処が難しい根本的な理由は、20 世紀を通じて社会発展の指針となってきた「経済成長と科学技術の発展を中心とする進歩」という大きな物語が、その有効性を失って久しいことにある。共通の目的と方向性の喪失は、組織や社会のあらゆるレベルにおいて、意思決定の基盤そのものを揺るがし続けている。そのような中で、我々はポスト SDGs 時代を見据えた、新たなグローバルアジェンダの構想という、時代的な要請に直面しているのである。

この状況は、ビジネス、政策、学術、そして芸術や教育、市民活動といったあらゆる領域において、より根本的な問いへの回帰を不可避なものとしている。現代社会の基盤となっている「効率性」や「合理性」の追求は、目的を達成するための「How (いかにして)」は教えるが、そもそも「Why (なぜ)」その目的を目指すのか、という本質的な問いに答えを与えるものではない。だからこそ、今問われるべきなのは「我々は何を価値あるものと見なし、いかなる社会を目指すべきか」という、価値 (value) をめぐる問いなのである。本稿は、この根源的な問いに向き合うためのアプローチを提示することを目的とする。

そのアプローチの第一歩として、本稿はまず、現代の課題を根本から理解するための視点を提示する。第一に、課題を生み出すメカニズムを「**分断 (Fragmentation)**」——異なる価値観の対立——と「**変容 (Transformation)**」——新たな技術や社会変化による価値観の再編——という二つの力学 (プロセス) として捉える。

第二に、この複雑な力学を分析し、乗り越えるための思考法として「**ABC モデル***」を提案する。このモデルは、社会現象を、①可視的な「実践」(A: Action レベル)、②その根底にある「価値観・世界観」(C: Core レベル)、そして③両者をつなぐ「媒介」(B: Bridge レベル) の三つのレベルで構造的に把握する。そして、この構造を用いて問題の根本原因へと思考を深く掘り下げ (潜行)、新たな価値観から未来を描き出す (浮上) という、ダイナミックな思考のプロセスを促す。

このフレームワークを真に機能させる『潜行と浮上』の往還運動は、哲学を始めとする人文学の知的技術なしには成立しない。価値の探求に不可欠なその技術は、特に哲学において、以下の四つの知的な営みとして整理されてきた：(1) 暗黙の前提を可視化すること、(2) 概念を厳密に定義すること、(3) 多様な価値観の対話を促すこと、そして(4) 新たな価値を構想すること。これらは、単なる分析に留まらず、新たな社会を構想し、実践へと繋げるための知的な活動そのものである。

以上の分析と方法論は、社会変革を目指す実践者に向けた、以下の 4 つの行動指針 (アジェンダ) へと結びつく：

1. **価値の焦点化**：課題の根底にある価値を探求の対象とする

2. **根源的問いと実践の結合：**価値の探求を社会のあらゆる領域における実践と結びつける
3. **人文学の知の活用：**価値に関する専門的知見を実践的文脈で積極的に活用する
4. **価値共創ネットワークの構築：**セクターや地域を越えた協働的な価値探求の場（プラットフォーム）を形成する

これらのアジェンダが指し示すのは、「**価値多層社会 (Multilayered Society of Values)***」という新たな社会ビジョンである。これは、価値の多元性と多層性（個人や社会が、その内側に矛盾しうる複数の価値を抱える構造）を社会的豊かさの源泉として積極的に位置づけ、継続的な対話と創造的な緊張関係を通じて、より包摂的で革新的な社会を実現しようとする未来像に他ならない。

本稿は、このビジョンの実現に向けた、学术界、産業界、政策立案者、芸術家、教育者、宗教家、そして行動する市民社会の協働による探求への貢献を意図している。

目次

エグゼクティブサマリー	1
序章：問いの立て方を変える	5
1. 複雑化・深刻化する現代の課題	5
2. 20 世紀的「物語」の機能不全	5
3. 「そもそも」を問う時代：本稿の目的とアプローチ	5
第 I 部：なぜ「価値」を問うのか	9
第 1 章：すべての問題の核心にある「価値」	10
1.1. 「根源的な問い」の正体	10
1.2. 現代における「価値を問う」ことの二重の困難性	10
1.3. 課題の核心：価値の多元性と、それを内包する多層性	11
第 2 章：変革のための分析的・構想的フレームワーク	13
2.1. 複雑な現実を構造化する分析手法：ABC モデル	13
2.2. 分析と構想の動的プロセス：潜行と浮上	14
2.3. 多元的な視点を統合する「価値関係マトリックス」	15
第 3 章：「価値」を扱う知の技術——人文学の再興	17
3.1. 価値探求の専門知とその実践的役割	17
3.2. 哲学の貢献：価値の根源を問い、新たな価値を構想する	17
3.3. 分野的危機と「実践との再結合（リカップリング）」の必要性	18
第 II 部：価値のレンズで現代を読み解く — ケーススタディと未来構想	19
第 4 章：ケーススタディ：現代的課題の深層構造を読み解く	20
4.1. 本章の視点：「分断」と「変容」というメカニズム	20
4.2. ケース 1：「分断」の構造 — 地政学的対立と民主主義の揺らぎ	21
4.3. ケース 2：「変容」の構造 — AI と「人間」の再定義	22

第5章:価値の構想 — 未来へのブループリント	25
5.1. 分析から構想へ:新たな「希望の物語」を描く.....	25
5.2. 世界的な潮流:新しい価値を求める声.....	25
5.3. 価値観・世界観の転換の一例:WE ターン	26
5.4. 「よいわれわれ」の条件と、分断を乗り越える原理:中空構造	27
5.5 多様なブループリントの共創に向けて.....	28
第Ⅲ部:未来へのアジェンダ	31
第6章:未来を構想するための4つのアジェンダ.....	32
4つのアジェンダ.....	32
終章:価値多層社会というビジョンへ	35
付録:用語集	37
参考文献.....	41

序章：問いの立て方を変える

1. 複雑化・深刻化する現代の課題

現代を生きる我々は、歴史上、類例のない挑戦の数々に直面している。地政学的な緊張は世界の安定を揺るがし、気候変動は地球規模での生存基盤を脅かす。そして、人工知能（AI）に代表されるテクノロジーの指数関数的な進化は、社会の構造そのものを根底から変えようとしている。

これらは個別の問題として存在するのではなく、相互に作用し影響を増幅させ合う、いわば「**ポリクライシス (Polycrisis)**¹⁾」とも呼ぶべき複合的な危機に他ならない。この巨大な構造的課題を前に、過去の成功体験から導かれた問題解決の手法や、既存のフレームワークは急速にその有効性を失いつつある。企業経営者、政策立案者、そして市民社会のリーダーたちは、かつてないほど予測困難な環境²⁾の中で、日々の意思決定を迫られているのが実情である。

2. 20 世紀的「物語」の機能不全

この困難の背景には、より深刻な問題が存在する。それは、かつて社会の進歩を支えてきた共通の「物語」が、もはや機能不全に陥っているという現実である。フランスの哲学者ジャン＝フランソワ・リオタールが予見したように、20 世紀後半以降、「経済成長」や「イデオロギー」といった社会全体を統合する「**大きな物語 (Grand Récit)**³⁾」はその説得力を失い続けてきた。

成長の果実は遍く行き渡ることなく、むしろ格差を拡大させ、技術の進化は、我々の生活を豊かにする一方で、新たな倫理的課題や社会的分断を生み出している。これは単なる戦略や戦術の陳腐化ではない。より本質的なのは、社会が共有できる「進歩」や「発展」の定義そのものが揺らぎ、我々が進むべき羅針盤を見失っているという事態である。それは、成長という「手段」が「目的」そのものと化し、我々が本来目指すべきであったはずの人間的な豊かさという目的が見失われる、いわば「発展の空洞化」とでも呼ぶべき現象に他ならない。

3. 「そもそも」を問う時代：本稿の目的とアプローチ

共有された目的地が失われた今、あらゆる主体にとって、自らが立つ場所から「そもそも論」、すなわち根源的な問いに向き合うことが不可避となった。

「そもそも『発展』とは何を意味するのか」「我々が目指すべき『良い社会』とはどのような姿なの

か」。こうした問いは、技術や資源といった「手段(How)」の議論から、我々が本来目指すべき「目的(Why)」の議論へと、思考の軸を転換させる。そして、その核心にあるのは、「我々は何を重要で、望ましく、正しいと見なすのか」という、**価値(value)**をめぐる問いに他ならない。

この価値をめぐる問いへの回帰は、抽象的な議論ではなく、現実的な要請である。経済成長一辺倒の社会指標を見直す「Beyond GDP」の潮流はその一例である。こうした潮流は、国際社会の政策アジェンダにも影響を与え、その一つの実践的な応答として結実したのが、国連が掲げる**持続可能な開発目標(SDGs)**である。SDGs は、人類が共有すべき目標を包括的に示し、21 世紀前半の羅針盤として重要な役割を果たしてきた。

しかし、その広範な実践を通じて、SDGs が内包する構造的な限界もまた、明らかとなった。第一に、目標間に生じる価値の衝突、すなわち「**分断**」を乗り越えるための高次の指針が不在である点だ。17 の目標は包括的であるがゆえに、「経済成長」と「環境保全」のように深刻なトレードオフを含むが、それらの価値が衝突した際に何を優先すべきか、その判断を導くための高次の論理は、枠組み自体に備わっていない。

第二に、その策定後に社会を根底から揺るがし始めた根源的な「**変容**」に対し、その設計思想が対応しきれていないという問題である。AI の進化が「人間性」の定義すら問い直す現代において、「人間と AI の望ましい共生」といった新たな価値の創出そのものが求められているが、SDGs はそのような未知の問いに正面から応えるようには設計されていないのだ。

このように、既存の価値観が衝突する「分断」と、新しい現実が我々に価値観そのものの再定義を迫る「変容」。この二重の挑戦こそが、ポスト SDGs 時代のアジェンダを構想する上での出発点となる。この挑戦に応えるべく「価値とは何か」を根源から問い直すこと、それこそが、今まさに我々に課せられた実践的な要請なのである。

しかし、我々が直面する根源的な問いに、唯一絶対の答えは存在しない。本稿の目的は、したがって、安易な処方箋を示すことではない。むしろ、あらゆるセクターのリーダーたちがこの困難な問いに正面から向き合い、自らの手で新たな指針を主体的に創り出していくための**思考様式(a mode of thinking)**を提案することにある。本稿は、その知的かつ実践的な挑戦を導くための、思考の手引きとなることを目指すものである。

¹ ポリクライシス(Polycrisis)：複数の地球規模の危機が同時発生し、相互に関連することで、個々の危機の総和を上回る複合的な脅威を生み出す状況を指す。この用語は 1990 年代から存在したが(Kern & Morin, 1993)、現代の複雑な世界情勢を分析する文脈で歴史家のアダム・トウズが効果的に用いたことで再注目された(Tooze, 2019, 2021)。特に、世界経済フォーラム(WEF)が 2023 年の「グローバルリスク報告書」で中心的な分析概念として採用したことで、国際的な政策・ビジネスの議論において広く使われるようになった。

² 現代社会の予測困難な状況を表現するために、様々な概念が提唱されている。従来ビジネス領域で広く用いられてきた VUCA(変動性・不確実性・複雑性・曖昧性)に加え(Bennis & Nanus, 1985; Mackey, 1992)、より

深刻でカオスな事態を描写する概念として、未来学者ジャメイス・カシオは「BANI」を提唱した(Cascio, 2020)。これは、システムが **Brittle** (もろく、脆く崩れやすい)、人々が **Anxious** (不安を感じ)、因果関係が **Non-linear** (非線形) で、事態が **Incomprehensible** (理解不能) であるという現代の状況を指す。

³ 大きな物語 (Grand Récit) : フランスの哲学者ジャン=フランソワ・リオタールが 1979 年の著作『ポストモダンの条件』で提唱した中心概念である(Lyotard, 1986)。これは、ある社会や文化において、その制度、実践、知識のあり方を正当化し、人々を一つの方向へと統合する、包括的で普遍的な世界観や歴史観 (例えば「科学技術の進歩による人類の解放」など) を指す。リオタールは、ポストモダン状況とは、こうした「大きな物語」がその説得力を失い、多様でローカルな「小さな物語」が乱立する時代であると診断した。

第Ⅰ部：なぜ「価値」を問うのか

目的と概要

本稿の議論の土台を築く第Ⅰ部では、なぜ現代において「価値」を問うことが不可避であるのかを体系的に論証する。ここでは、表層的な問題解決アプローチが限界に達している現代の社会課題を、その根底にある「価値」の次元から読み解くための理論的基盤を構築する。

各章の概要

第Ⅰ章「すべての問題の核心にある『価値』」：序章で提起された「根源的な問い」の正体を解明し、それが必然的に価値をめぐる問いへと収斂することを改めて定義する。さらに、価値を問うことが困難な理由を、既存価値体系の「衝突」と新しい価値の「創出」という二重の構造として分析する。最後に、価値の「多元性」と「多層性」という、課題の背景に潜む複雑さを明らかにする。

第Ⅱ章「変革のための分析的・構想的フレームワーク」：複雑な価値の構造を体系的に分析し、未来を構想するための実践的なツールを提示する。「ABC モデル」による現実の構造化、「潜行と浮上」という動的思考プロセス、そして多様な視点を統合する「価値関係マトリックス」を通じて、本質的な変革への道筋を明確化する。

第Ⅲ章「『価値』を扱う知の技術」：価値探求を支える人文学、特に哲学の実践的役割を再定義する。価値の根源を問い、新たな規範を構想するための四つの知的営為を体系化し、現実の課題解決との「再結合（リカップリング）」の必要性を論じる。

第1章：すべての問題の核心にある「価値」

1.1. 「根源的な問い」の正体

序章で論じた通り、現代のリーダーたちは、これまで自明とされてきた進むべき道を見失い、「根源的な問い」への回帰を迫られている。では、その問いの正体とは、一体何であろうか。

「そもそも『発展』とは、何を意味するのか」

「我々が目指すべき『良い社会』とは、どのような姿なのか」

「技術は、誰のために、何を成すために存在すべきなのか」

このような根源的問いはすべて、突き詰めれば「**私たちは何を重要で、望ましく、正しいと信じているか**」という、一つの問いへと収斂する。これこそが、本稿が論じる「価値」の定義に他ならない。つまり、価値とは「**私たちが重要で、望ましく、正しいと信じている事柄**」であり、それによって我々が進むべき「方向性 (orientation)」を指し示す、内なるベクトルなのである。

したがって、「根源的な問い」に立ち返るといふ我々の営みは、必然的に「価値を問う」とことと分かち難く結びついている。戦略や計画が行き詰まる根本原因は、技術や資源といった目に見える要素の不足のみにあるのではない。それは、あらゆる組織的・個人的な行動の土台である「価値」の次元に、我々が意識的にアクセスできていないことに起因するのである。

1.2. 現代における「価値を問う」ことの二重の困難性

「価値を問う」といふ営みは、現代においてなぜこれほどまでに重要で、かつ困難なものとなっているのか。その構造は、二つの異なる、しかし相互に関連しあう側面から理解することができる。

第一に、**既存の価値体系の「衝突」**である。序章で述べた「20 世紀的物語」の機能不全は、これまで暗黙の了解の下に序列化されていた多様な価値観を、いわば水平な地平へと解き放った。かつては「経済成長」という至上命題の下に副次的なものと思なされがちであった、「環境の持続可能性」「文化の多様性」「地域の自律性」といった価値が、それぞれ独自の正当性を主張し始めたのである。その結果、現代のリーダーたちは、「グローバルな競争力か、国内雇用の保護か」「イノベーションの加速か、倫理的配慮か」といった、容易な答えのない**トレードオフ**の矢面に立たされている。この価値の衝突が、社会に深刻な**分断**をもたらしているのである。

第二に、**新しい現実がもたらす価値の「創出」**の必要性である。AI や生命科学の進化といった地殻変動は、我々がこれまで準拠してきた既存の価値体系そのものを揺るがし、全く新しい問いを突きつけている。「人間と機械の創造性の本質的な違いはどこにあるのか」「遺伝子を編集する技術を、我々はどこまで許容すべきなのか」。これらは、過去の倫理規範や価値観の延長線上だけでは答えを出すことができない。我々は、新しい現実に対応するための、**新しい価値基準そのものを創**

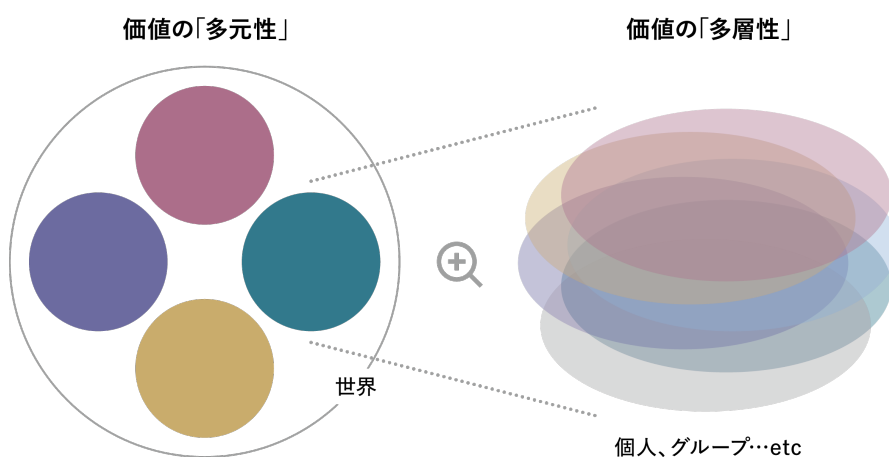
り出さなければならないという、かつてない挑戦に直面しているのである。これは、社会の基盤そのものが構造的な変容を迫られていることに他ならない。

1.3. 課題の核心：価値の多元性と、それを内包する多層性

この二重の困難の根底には、さらに根源的な構造が存在する。それは、価値の「多元性」と「多層性」である。

価値の多元性(pluralism)とは、社会に存在する多様な価値(例えば、自由、平等、安全、伝統など)が、それぞれ独自の正当性を持ち、単一の絶対的なものさしでは測ることができないという性質を指す。この「**通約不可能性(incommensurability)**⁴」こそが、異なる価値観を持つ主体間の合意形成を、本質的に困難にする根本原因である。アイザイア・バーリンが強調したように、自由、平等、正義といった人間にとっての究極的な価値は、互いに矛盾しうるものであり、それらをすべて同時に完全に満たす単一の理想社会は存在しない。この認識は、チャールズ・テイラーによってさらに深化させられた。テイラーは、この対立が単に抽象的な価値の間だけでなく、それぞれが独自の「真正な」在り方を持つ異なる文化様式の間でこそ、現代社会の根本的な緊張を生み出すと論じた(Taylor, 1994, 2010)。この価値の「多元性」の認識が、我々の議論の出発点となる。

しかし、現代の課題をさらに複雑化させているのは、この多元的な価値の対立が、異なる国家や組織の間に存在するだけではないという事実である。ここで我々が特に注目したいのが、**一人ひとり、そして一つの組織や社会の「内側」にも、矛盾し、衝突し合う価値観が多層的に存在している**という構造であり、本稿はこれを価値の「**多層性(multilayeredness)**」*と呼ぶ。



例えば、普遍的だとされる人権や自由といった西洋近代に由来する価値観(価値 A)を自らの社会の基本原則として受け入れつつも、同時に、その社会が歴史的に育んできた共同体固有の伝統

や文化に基づく価値観（価値 B）もまた、アイデンティティの根幹をなすものとして尊重したい、という葛藤は、グローバル化の進展と共に多くの社会や個人の内で見られるようになった。これは、ステレオタイプな文化相対主義やオリエンタリズム⁵に陥ることなく、慎重に理解されるべき内的な緊張関係である。この「内なる価値の多層構造」を無視し、ある主体を単一の価値観の代表としてのみ捉えることは、アマルティア・センがアイデンティティの「矮小化⁶」について警鐘を鳴らした事態と同様の、危険な知的単純化に他ならない。

この外的な「多元性」と、内的な「多層性」という二重の構造に正面から向き合い、それを乗り越えていくためには、旧来の思考法に代わる、新しい知的な道具が不可欠となる。次章では、そのための具体的な思考様式を提示する。

⁴ 通約不可能性 (Incommensurability) : 哲学者アイザイア・バーリンらが価値多元主義を論じる際に用いた中核概念である (I. Berlin & Banville, 2013; S. Berlin Isaiah, 2025; Raz, 1986)。これは、二つ以上の異なる価値体系や概念 (例: 「芸術的価値」と「経済的価値」) の間に、それらを比較・評価するための単一の共通尺度がなく、一方を他方に完全に翻訳したり、還元したりすることができない状態を指す。「自由」と「平等」のように、どちらも人間にとって究極的に重要であるが、それらを同時に完全に満たす単一の理想社会は存在し得ない、という現実を直視するための重要な概念である (Chang, 1997)。

⁵ オリエンタリズム (Orientalism) : 文学批評家のエドワード・サイードが 1978 年の主著で提唱した、西洋が「東洋 (オリент)」に対して抱いてきた、偏見に満ちた歪んだイメージの体系を指す批判的用語 (Said, 1978)。サイードは、西洋がオリントを、自らとは対照的な「他者」として、異国的で、非理性的で、後進的であると表象することで、植民地支配をはじめとする権力関係を正当化してきたと論じた。

⁶ アイデンティティの矮小化 (Identity Diminishment) : ノーベル経済学賞受賞者であるアマルティア・センが、その著作『アイデンティティと暴力』などで警鐘を鳴らした概念 (A. K. Sen, 2007)。個人が持つ多様で複合的なアイデンティティ (国籍、宗教、職業、趣味など) を無視し、たった一つの属性 (例: 「イスラム教徒」「西洋人」) に還元してしまうことの危険性を指す。このような知的単純化は、他者へのステレオタイプな認識を助長し、深刻な対立や暴力の温床となりうるとセンは論じた。

第2章：変革のための分析的・構想的フレームワーク

2.1. 複雑な現実を構造化する分析手法：ABCモデル

価値をめぐる問題が複雑なのは、異なるレベルの事象が目に見えない形で絡み合っているからである。戦略レベルの議論と、日々現場で起きている問題が、なぜかみ合わないのか。その根本原因は、両者の間に横たわる、見えざる価値の断絶にある。この複雑な現実を構造的に把握するため、我々は社会を三つのレベルで捉える「ABCモデル*」を提案する。これは、表層的な事象とその深層にある構造を区別する多くの先行研究（例えば、冰山モデル⁷や U 理論⁸）の知見に連なりつつ、特に現代社会における価値の機能を分析するために設計されている。

■ Action レベル：実践

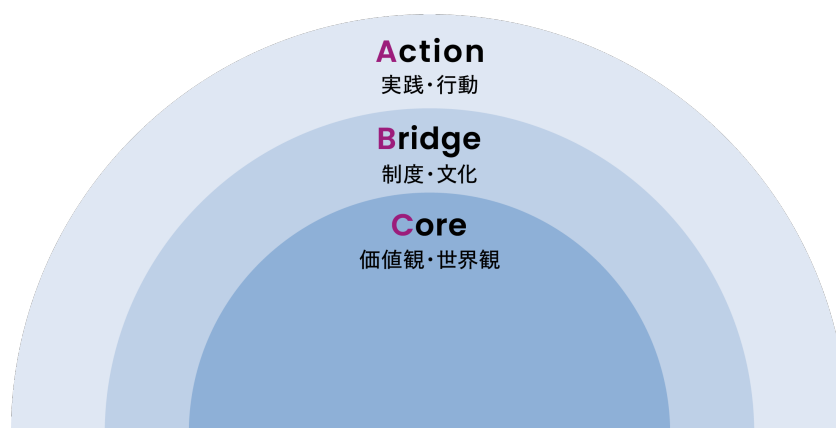
これは、日々私たちが行う具体的な活動や、社会で目に見える形で現れる「**実践・行動**」のレベルである。最も表層的で観測しやすいが、その状態は、より深層にある B レベルと C レベルのあり方を映し出す鏡でもある。

■ Bridge レベル：媒介

これは、表層の具体的な行動（A レベル）と、それを根底で方向づける「**価値観・世界観**」（C レベル）とを媒介する機能（**Bridge**）を担うレベルである。このレベルは、法律、規制、組織構造といった**フォーマルな制度**や、社会的な慣習、マインドセット、共有される認識、芸術表現といった**インフォーマルな文化・社会様式**など、多様な要素によって構成される。その名の通り、「**理念**」と「**実践**」とを繋ぐ「**橋**」の役割を担う。

■ Core レベル：根源

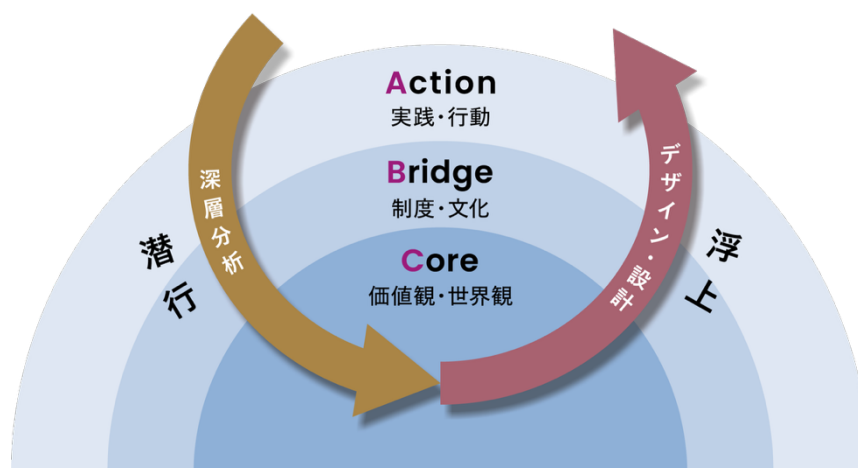
これは、社会や組織、個人の行動を根底で方向づける、「**価値観・世界観**」のレベルである。それは、我々が世界をどのように認識し、意味づけるかの根底にある**思考と行動の基盤**であり、「何が善か」「何が重要か」といった最も深いレベルの問いを扱う。



2.2. 分析と構想の動的プロセス：潜行と浮上

この ABC モデルは、静的な分析ツールに留まらない。それは、本質的な変革を生み出すための、ダイナミックな思考プロセスを促す。この思考プロセスは、「**潜行***」と「**浮上***」という二つのベクトルを持つ。

- **潜行 (Diving)**：目に見える Action レベルの問題、例えば「気候変動対策として再生可能エネルギーの導入が十分に進まない」という事象から出発する。「なぜこの行動が停滞しているのか？」と問いを立て、その背景にある Bridge レベルの機能不全、例えば「炭素排出の社会的コストを十分に価格転嫁できていない市場制度」や「既存の化石燃料産業を優遇する政策」を分析する。さらに、「なぜ我々はそのような制度や政策を維持しているのか？」と問いを深め、根底にある Core レベル、例えば「短期的な経済成長を、地球環境の長期的な持続可能性よりも優先する価値観」や「将来世代への責任よりも現世代の利益を重視する世界観」へと掘り下げていく。これは、**問題の根本原因を特定するための分析的プロセス**である。
- **浮上 (Surfacing)**：Core レベルで、「我々が本当に目指すべきは、持続可能な社会との共生である」といった、新たな価値観や目的を見出したとしよう。そこを新たな基点として、「その価値を実現するためには、どのような Bridge (制度・社会様式) を設計し直すべきか?」、そして「それはいかなる Action (実践) に繋がるべきか?」を構想していく。これは、**新たな価値から未来を構想するための創造的プロセス**である。

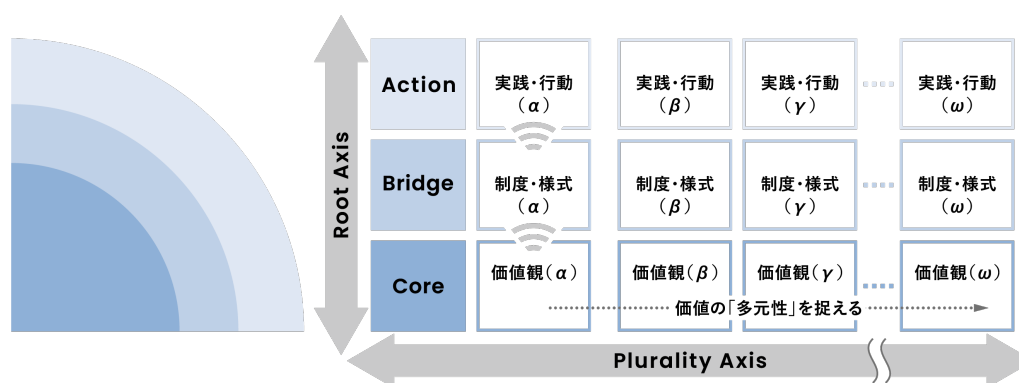


表層的な問題解決に留まらない、本質的で持続可能な変革は、この「**潜行**」と「**浮上**」の絶えざる**往還運動**の中からのみ生まれる。システム思考家ダネラ・メドウズが示したように、社会システムに最も大きな変化をもたらす「**レバレッジポイント**⁹」は、物理的な要素の変更よりも、システム全体の目的や、その根底にある価値観（パラダイム）の転換にある。A レベルや B レベルへの介入も重

要であるが、社会の根幹とも言うべきCレベルにアプローチすることこそ、真のパラダイムシフト¹⁰を引き起こすための、最も効果的で本質的な介入なのである。

2.3. 多元的な視点を統合する「価値関係マトリックス」

ABC モデル(縦軸)に、前章で論じた価値の「多元性」を捉えるための「多様なステークホルダー」(横軸)を掛け合わせることで、我々のフレームワークは二次元の「価値関係マトリックス*」へと拡張される。



このマトリックスを用いることで、「誰にとっての、どのレベルが問題になっているのか」を構造的に可視化することが可能となる。例えば、ある企業の新しい事業(Aレベル:Action)が、株主(ステークホルダー1)のCore(Cレベル:短期的な株主価値の最大化)には合致する一方で、その事業が拠点を置く地域社会(ステークホルダー2)のCore(Cレベル:長期的な環境持続性と雇用の安定)とは深刻な衝突を引き起こしている、といった複雑な関係性を一枚の絵として捉えることができる。

この分析的・構想的フレームワークは、複雑な問題の前で思考が停止してしまう罠から我々を解放する。それは、見えにくい価値の構造を可視化し、深層にある本質的な課題を発見し、未来への実践を構想するための、体系的な思考プロセスを提供するものである。

⁷ 氷山モデル(Iceberg Model): システム思考で用いられる代表的なフレームワークである。目に見える「出来事(Events)」は文字通り氷山の一角に過ぎず、その水面下には、出来事の傾向である「パターン(Patterns)」、そのパターンを生み出す社会の「構造(Structure)」、そして最も深層には、その構造を是とする人々の「意識・価値観(Mental Models)」が存在すると捉える。問題の根本原因にアプローチするためには、より深層のレベルに介入する必要があることを示唆する(Senge, 2011)。

⁸ U理論(U Theory): マサチューセッツ工科大学(MIT)のオットー・シャーマーによって提唱された、個人、組織、社会が過去の延長線上にない本質的な変革(創発)を生み出すための理論であり実践手法である。変革のためには、一度「U」の谷の底に降りるように、既存の思考の枠組みを保留し(Suspending)、深く観察し(Seeing)、

自らの内なる源 (Source) に接続して未来の可能性を感じ取り (Presencing)、そこから新たなビジョンや行動を具体化し立ち上げる (Realizing) というプロセスを経る必要があると説く (Scharmer ほか, 2010)。

⁹ レバレッジポイント (Leverage Points): システム思考家のダネラ・メドウズが提唱した、複雑なシステムの挙動に大きな変化をもたらすことができる、効果的な介入点のこと (Meadows, 2015)。「てこ」の比喻であり、小さな力で大きな変化を生み出す点を指す。メドウズは、物理的な数値を変更する (例: 税率を変える) といった介入よりも、システムのルールや情報フロー、そして最も効果的なのはシステム全体の目的や根底にあるパラダイム (価値観) を変えることであると論じた。

¹⁰ パラダイムシフト (Paradigm Shift): 科学史家のトーマス・クーンが 1962 年の著作『科学革命の構造』で提唱した概念 (Kuhn, 2023)。通常科学が前提とする「パラダイム」(ある時代の科学者共同体に共有されている物の見方や考え方の枠組み) が、説明不能な事例の蓄積によって揺らぎ、やがて非連続的で革命的な仕方、まったく新しいパラダイムへと転換するプロセスを指す。現在では、科学の世界だけでなく、社会全体の価値観やビジネスモデルの根底的な転換を指す言葉として広く使われている。

第3章：「価値」を扱う知の技術——人文学の再興

3.1. 価値探求の専門知とその実践的役割

「価値」を扱う営みは、単なる精神論や個人の経験則に留まるものではない。それは、**人文学 (Humanities)** が、何世紀にもわたり体系的に探求してきた、専門的な知の領域である。人文学とは、人間を歴史的、文化的な存在として捉え、その行動や思索の根源にある「意味」と「価値」を説明することを目的とする学問分野の総称である。

具体的に、人文学は、我々が多様な価値体系を理解し、自らの価値観を相対化し、そして新たな価値観を構想するための、多様な「レンズ」を提供する。例えば、歴史学は過去の探究を通じて現代の価値観の相対性を暴く。文学や芸術は、時に社会の隠された前提を鋭く描き出し、分析的言語では捉えきれない価値の機微を表現することで、新たな世界の見方を提案する。文化人類学は異文化比較から常識を揺さぶる。また、これらの知見をいかにして次世代に伝え、社会に根付かせるかという、価値の継承と実装の道筋についても、人文学の領域で探求されてきた。

したがって、本稿が提示する思考様式は、人文学が長年にわたり培ってきた、これらの知的実践の現代的応用とも言える。技術の進化が社会の前提を覆し、経済合理性だけでは解けない課題が中心となる現代において、その重要性はかつてなく高まっている。数値化できない「意味」や「価値」を専門的に扱う人文学の知見は、もはや単なる「教養」ではなく、企業のパーパス策定、公共政策の立案、テクノロジーのデザインといったあらゆる実践領域において、本質的な問いを立て、新たな方向性を構想するための、不可欠な知的インフラなのである。

3.2. 哲学の貢献：価値の根源を問い、新たな価値を構想する

人文学の中でも、特に**哲学 (Philosophy)** は、価値観、世界観、倫理規範といった、我々の思考と行動の根幹をなす要素そのものを、最も意識的かつ根源的に問い直すことを、その本領としてきた学問である。

哲学が価値探求において果たしうる貢献は、以下の四つの知的営為に集約される。ただし、これらの営為は、哲学のみならず他の人文学分野においても、また、優れた科学者、芸術家、実践的なリーダーたちの仕事においても重要な役割を果たしている。しかし、哲学は、これらの営為そのものを自己目的化し、数千年にわたってその方法論を体系的に練り上げてきたという点で、価値をめぐる根源的な問いにアプローチするための、重要な知見と方法論を提供すると言えるだろう。

1. **前提の可視化と批判的検討：**我々が組織や社会の中で無意識に受け入れている価値観（例えば「成長は常に善である」など）の根拠を問い、その隠れた前提や論理構造を白日の

下に晒す。これは、思考の土台そのものを客観視する、根源的な分析のプロセスである。

2. **概念の明確化と再定義:** 「幸福」「公正」「責任」「人間性」といった、価値の核となる抽象的な概念の意味を厳密に分析し、現代的な文脈の中で再定義する。これにより、曖昧で感情的な対立に陥りがちな価値の議論に、共通の土台と言語を与え、生産的な対話を可能にする。
3. **多様な価値観の構造的解明と対話促進:** 異なる価値観がなぜ、どのように衝突するのかを構造的に解明する。それにより、単なる意見の対立を超え、異なる価値体系間の生産的な対話を可能にするための、より高次の思考の枠組みや共通言語を提供する。
4. **新たな価値の構想と論証:** そして、これが現代において最も重要な役割であるが、既存の価値観の限界を踏まえ、より望ましい社会を支えるための新たな倫理規範や価値体系を積極的に構想し、その論理的・倫理的な正当性を提示する。これこそが、京都哲学研究所が掲げる「**哲学とは、価値の提案である**」という思想の中核をなす、未来創造のプロセスである。

3.3. 分野的危機と「実践との再結合（リカップリング）」の必要性

しかしながら、人文学、とりわけ哲学が、常にその実践的な力を発揮してきたわけではない。専門化・細分化の道を過度に進んだ結果、現実社会の複雑な課題から乖離し、一部ではその存在意義すら問われるという**分野的な危機**に陥っている側面も、我々は率直に認めなければならない。現実から遊離した知は、いかに洗練されていようとも、社会を変革する力を持ち得ない。

この危機を乗り越え、人文学が本来のポテンシャルを解放するためには、ビジネス、テクノロジー、政策決定といった**実践の最前線との「再結合（リカップリング）」**が不可欠である。本稿が提案する思考様式と、それに基づく運動は、まさにこの再結合を促すための具体的なフレームワークであり、呼びかけに他ならない。「価値」を問う時代は、人文学が、再び社会変革のエンジンとなる時代である。しかしそれは、専門家が一方的に答えを教えるという旧来の関係性ではない。実践の現場で格闘するリーダーと、知の専門家が互いの領域を越境し、手を取り合うことで初めて、未来を切り拓くための新たな知が創発されるのである。

第Ⅱ部：価値のレンズで現代を読み解く ―ケーススタディと未来構想

目的と概要

第Ⅱ部では、第Ⅰ部で構築した理論的フレームワークを現実に応用し、分析から構想への転換を実現する。前半では、現代社会が直面する複雑な課題を「価値のレンズ」で読み解くことで、従来のアプローチでは見えなかった本質的な構造を明らかにする。後半では、その分析を踏まえ、未来を創造するための具体的な社会構想、すなわち「ブループリント」を提示する。分析と構想の両面を通じて、価値を基軸とした思考の実践的有効性を実証する。

各章の概要

第4章「ケーススタディ：現代課題の深層構造を読み解く」：現代社会が直面する代表的な課題を、「分断」と「変容」という二つの根源的な力学として捉え直す。「分断」のケースとして地政学的対立と民主主義の揺らぎを、「変容」のケースとしてAIの進化がもたらす「人間」概念の再定義を取り上げ、ABCモデルを用いてその深層構造を分析する。これにより、表層的な現象の背後にある価値の対立や揺らぎを可視化し、本質的な解決に向けた問いの立て方を提示する。

第5章「価値の構想 ― 未来へのブループリント」：現代の危機を乗り越えるための「希望の物語」を構想する章である。まず、世界中で生じている「価値の再定義」という知的潮流を、経済パラダイムの転換、人間開発と幸福の再定義、グローバルな正義と共生の哲学、存在論的転回という4つの領域に整理して紹介する。続いて、その具体例として、出口康夫が提唱する「WEターン」（個人中心から「われわれ」中心への転換）と「中空構造」（多様な価値観が共存するための設計原理）という哲学的構想を詳述する。最後に、これらを参考にした多様なブループリントの共創の必要性を論じる。

第4章：ケーススタディ：現代的課題の深層構造を読み解く

4.1. 本章の視点：「分断」と「変容」というメカニズム

第I部で提示した理論的フレームワークが、いかにして現実の複雑な課題の分析に貢献しうるのか。本章では、その実用性を示すため、具体的なケーススタディを通じて、現代社会が直面する問題を「価値のレンズ」で読み解いていく。

その分析の軸となるのが、「**分断**」と「**変容**」という二つのメカニズムである。これらは、社会課題を相互排他的に分類するためのカテゴリーではない。むしろ、現代において「価値」が問題となる際の、二つの根源的な力学(dynamics)を示す言葉である。

- **分断(Fragmentation)**：既存の価値体系が、それを束ねていた共通の物語を失うことによって互いに衝突し、解決困難なトレードオフを生み出す力学を指す。これは、主に確立された価値観同士の**対立構造**として現れる。
- **変容(Transformation)**：新しいテクノロジーや社会・環境の変化が、既存の価値体系そのものを根底から揺るがし、我々に新たな価値の定義や創出を迫る力学を指す。これは、価値観の**揺らぎや再編のプロセス**として現れる。

現実の社会課題において、これら二つの力学は、常に入り組んだ仕方では相互に作用している。例えば、AIの登場という「変容」は、「効率性」を重視する価値観と「人間の尊厳」を重視する価値観の「分断」を先鋭化させる。逆に、地政学的な「分断」は、自国中心の技術覇権競争を加速させ、社会全体の「変容」を不可逆的に促す。このように、両者は常に連動している。

この構造認識に基づき、以下のケーススタディでは、具体的な課題を「分断」と「変容」の相互作用として捉え、その深層にある価値の構造を解き明かしていく。本章で試みるケーススタディは、特定の解決策を提示することを目的とするものではない。むしろ、本稿が提案する「価値のレンズ」を通して現代の課題を捉え直すことで、これまで見過ごされがちであった、より根源的な論点がどこにあるのかを探ることを目的とする。

このアプローチは、決して議論の単純化を意図するものではない。探求の中で、時には、より複雑で、答えの出にくい問いへと我々を導くこともありうる。しかし、本質的な変革への道筋は、そうした根本的な問いの構造を理解することから始まると考えられる。本章は、そのための思索を深める一助となることを意図している。

4.2. ケース 1: 「分断」の構造 — 地政学的対立と民主主義の揺らぎ

現代を象徴する「分断」は、地政学的な対立の激化や、多くの国で深刻化する民主主義の揺らぎといった現象に、最も先鋭に現れている。本稿では、価値のレンズを通してその深層構造を読み解くことを試みたい。なぜなら、その本質には、我々の社会を支えてきた価値体系そのものの構造的危機が存在すると考えられるからである。本稿の ABC モデルは、この価値の次元に光を当てるための一つの有効な視座を提供する。

第一に、問題の根源には Core レベルにおける、単一の要因ではなく、これまで国際社会の共通の参照点としてかろうじて機能してきた価値基盤の侵食と、それに伴う競合する価値観同士の衝突の激化という、二重の構造変化がある。

第二次世界大戦後の国際秩序は、「武力による一方的な現状変更の禁止」や「普遍的人権の尊重」といった国際法に基づく規範的価値を、多くの内部矛盾や葛藤をはらみながらも、国際社会の共通の参照点としてかろうじて機能させてきた。

この「共通の参照点の喪失」と「価値観の衝突の激化」という二重の力学は、現代の分断を読み解く鍵となる。地政学の舞台では、ウクライナ侵攻やパレスチナ問題に見られるように、「自国の安全保障」や「歴史的正当性」といった個別的な主張が、国際的な規範を乗り越える根拠として提示される。より大きな文明レベルでは、サミュエル・ハンティントンがかつて「文明の衝突¹⁾」として論じた、西洋近代に由来する普遍主義的価値観と、台頭するグローバルサウスを含む非西洋圏が主張する文化的特殊主義との緊張関係が先鋭化し、「価値の多極化」時代とも言うべき様相を呈している。さらに、この価値対立は内面にも投影され、トランプ現象に代表されるように、グローバリズムとナショナリズムをめぐる価値観が衝突する、国家の「内なる分断」として現れている。これらすべてが、本稿で繰り返し論じてきた「大きな物語の機能不全」が、最も先鋭に現れた姿に他ならない。

第二に、この Core レベルの対立は、Bridge レベルの崩壊によって増幅されている。

価値観の衝突を調整し、社会を統合する役割を担うべき「橋」が、国内外で同時に侵食されている。国際レベルでは、国連や各種の国際条約といった制度（フォーマルな Bridge）がパワーバランスの変化によって機能不全に陥っている。国内レベルでは、共通の事実認識や対話の作法といった社会様式（インフォーマルな Bridge）が、ソーシャルメディアによる社会の分極化によって蝕まれている。Core の対立を媒介する Bridge が失われたことで、価値観の違いは、対話不能な断絶へと転化する。この国内の分断は、ロナルド・イングルハートらが指摘するように、物質主義的価値から自己表現的価値へと移行する大きな流れに対する「文化的逆流 (Cultural Backlash)¹²⁾」としてのポピュリズムの台頭と深く関連している。価値観の世代間対立が、共通の対話基盤そのものを侵食しているのである。

第三に、Core の対立と Bridge の崩壊は、Action レベルにおける破壊的なゼロサムゲームと

して噴出する。

価値をめぐる対話の道が閉ざされた時、残されるのは力による闘争である。国際社会では、それは軍事侵攻や貿易戦争といった、領土や経済的利権を奪い合う剥き出しの国益の衝突として現れる。国内では、それは選挙結果をめぐる深刻な対立や、ヘイトスピーチの横行といった、政治的・文化的覇権をめぐる闘争となる。これらはすべて、一方の勝利が、もう一方の完全な敗北を意味する**ゼロサムゲーム**¹³の構造を持つ。

したがって、この「分断」を乗り越えるための問いは、構造的に立て直されなければならない。「どちらの価値が正しいか」を問うことは、Action レベルのゼロサムゲームに参加することを意味し、本質的な解決には繋がらない。真の問いは、二つのレベルに存在する。

一つは、「これらの異なる価値体系が、互いを破壊することなく共存し、建設的な関係を築くためには、どのような Bridge を新たに構想し直す必要があるのか」という、新たな Bridge（政治、法制度、対話様式）の設計へと向かう実践的な問いである。

そしてもう一つは、より根源的な「この対立構造そのものを乗り越える、より高次の価値を Core レベルで生み出すことは可能か」という、未来創造への問いなのである。

4.3. ケース 2: 「変容」の構造 — AI と「人間」の再定義

人工知能、とりわけ生成 AI の爆発的な進化は、社会に大きな便益をもたらす一方で、我々が自明視してきた価値観を根底から揺がしている。この技術的「変容」は、単なる生産性向上の問題ではない。それは「人間とは何か」「知性とは何か」を問い直す、我々の価値体系そのものに対する構造的挑戦である。

第一に、問題の根源には Core レベルにおける、価値観の根本的な揺らぎがある。

歴史家のユヴァル・ノア・ハラリが指摘するように (Harari, 2022)、AI が人間の能力を凌駕するだけでなく、我々の感情や選択を我々自身よりも正確に予測し、操作しうようになった時、近代社会を支えてきた「自由意志」や「人間性」といった価値観の土台そのものが崩壊しかねない。さらに「効率性・生産性の最大化」という 20 世紀的な価値観は、技術革新を無条件に信奉し、その進化を加速させようとする思想（加速主義¹⁴）として先鋭化する。しかし、その力強い流れは、「人間の尊厳」「仕事の意味」「文化の多様性」といった、これまで人間社会が育んできた、数値化できない価値と根本的に衝突する。これは、確立された価値観同士の衝突というよりも、技術的「変容」が既存の価値体系の土台そのものを揺がしている状態である。

第二に、この Core レベルの揺らぎは、Bridge レベルの広範な不在によって、社会の混乱を招いている。

現行の著作権法、教育制度、企業の評価制度といった社会の「橋」は、人間の知的能力が優位

であるという暗黙の前提の上に設計されている。AI という新たな知性が登場したことで、これらの Bridge は急速に時代遅れとなり、AI が生成したコンテンツの権利や責任の所在、AI 時代に真に求められる人間の能力といった問いに対し、社会的な合意やルールが全く追いついていない。こうした「制度設計の空白」は、AI 研究者のスチュアート・ラッセルらが指摘するように (Russell, 2019)、AI に固定的な目的を与えることの危険性と、人間の価値と整合性を保ち続けることの重要性を浮き彫りにする。

第三に、Core の揺らぎと Bridge の不在は、Action レベルにおける深刻なジレンマとして現れる。

教育現場では AI の利用をめぐる混乱が学びの本質を問い直し、クリエイティブ産業では知財をめぐる紛争が表現の独創性の意味を揺るがす。企業は、AI 導入による短期的な生産性向上と、従業員のスキル陳腐化や士気の低下という長期的リスクとの間の、困難なジレンマに直面している。これは、新たな価値基準が確立されないまま、社会が変化に適応しようとする際に生じる、構造的な緊張関係である。

したがって、この「変容」を乗り越えるための問いもまた、構造的に立てられなければならない。「AI の進化を止めるべきか否か」という問いは、Action レベルのジレンマに囚われた、生産的でない問いである。真の問いは、二つのレベルに存在する。

一つは、「Core レベルで揺らぐこの『人間性』の価値を、AI との共生社会にいかにして責任ある形で根付かせるか」という、新たな Bridge (教育、法、倫理規範) の設計へと向かう実践的な問いである。

そしてもう一つは、より根源的な、「この技術的変容の時代において、我々がそれでもなお守り、新たに掲げるべき『人間性』の価値とは何か。そして、その価値を未来の社会の Core に据えることは可能か」という、未来創造への問いなのである。

¹¹ 文明の衝突 (The Clash of Civilizations): 政治学者のサミュエル・ハンティントンが 1993 年の論文 (のちに書籍化) で提唱した、冷戦後の国際政治を分析するための仮説 (Huntington, 2017)。彼は、冷戦時代のイデオロギー対立に代わり、未来の主要な紛争は、西欧、イスラム、中華、ヒンドゥーといった異なる「文明」間の文化的・宗教的な断層線上で起こるだろうと予測した。この理論は大きな論争を呼んだが、現代の地政学的対立を価値観の対立として捉える上で、依然として重要な参照点となっている。

¹² 文化的逆流 (Cultural Backlash): 社会の価値観が長期的にリベラルでコスモポリタンな方向 (例: 世俗化、多様性の受容、自己表現価値の伸長) へと変化するのに対し、その急速な変化に脅威を感じる層から、権威、伝統、秩序、自国文化の同質性といった価値を重視する、反動的で権威主義的な政治運動や投票行動が強まる現象を指す。政治学者のロナルド・イングルハートとピッパ・ノリスが、世界価値観調査のデータ分析に基づき提唱した (Norris & Inglehart, 2019)。近年の欧米諸国におけるポピュリズムの台頭や深刻な政治的分断を説明する、有力な理論的仮説として広く参照されている。

¹³ ゼロサムとプラスサム (Zero-sum vs. Plus-sum): ゲーム理論に由来する用語。「ゼロサム」は、参加者全

員の利得の総和(サム)がゼロ(あるいは一定)であり、一方の利益が必ず他方の損失となる、奪い合いの状況を指す。「プラスサム」(あるいはポジティブサム)は、協働やイノベーションによって利得の総和そのものが拡大し、参加者全員が(程度の差こそあれ)利益を得ることが可能な状況を指す(Neumann ほか, 2007)。本稿では、価値をめぐる「分断」がしばしばゼロサムゲームの構造に陥りがちであることを指摘し、深層にある Core (価値観) や Bridge (制度・文化) を再設計することによって、この構造をプラスサムゲームへと転換することの可能性と重要性を論じる。

¹⁴ 加速主義 (Accelerationism): 現代のテクノロジー (特に AI など) の発展と、それがもたらす社会システム (特に資本主義) の変容を、抑制するのではなく、むしろさらに加速させることで、既存のシステムを根底から乗り越え、まったく新しい社会を到来させようとする思想潮流を指す(Land ほか, 2012)。その内実は多様で、ニック・ランドのように資本主義のプロセスを徹底的に加速することでその自己破壊を促すという過激な立場から、テクノロジーによるユートピアの早期実現を目指すより楽観的な立場(シリコンバレーで近年影響力を持つ"Effective Accelerationism"など)まで、幅広いバリエーションが存在する。

第5章：価値の構想 — 未来へのブループリント

5.1. 分析から構想へ：新たな「希望の物語」を描く

これまでの章で、我々は現代社会が直面する課題を「価値」のレンズを通して分析し、その深層にある「分断」と「変容」の構造を解き明かしてきた。しかし、我々の目的は、過去を批判することではなく、未来を創造することにある。分析や批判だけに留まるならば、それは未来に対する責任を果たしたことはない。

危機や分断といった暗い物語に覆われ、未来への希望を描きにくくなっている現代において真に求められているのは、現状を乗り越えるための「**人々を惹きつけ、行動を促す、希望ある未来の物語**」である。

この章で紹介する哲学的構想(5.3、5.4 節)は、その出発点の一つとして、京都哲学研究所が探求してきた具体例である。しかし、それは決して唯一の答えではない。むしろ、本稿が最も重要視するのは、この具体例をたたき台とすることで、読者一人ひとりが自らの文脈で、あるいは多様な主体との協働の中で、**これとは異なる、あるいはこれを越えていく、無数の新たなブループリントを構想し始めること**である。未来は単一の設計図からではなく、多様なビジョンの創造的な競合と対話の中からこそ、豊かに立ち現れる。

5.2. 世界的な潮流：新しい価値を求める声

本稿が提示する構想は、孤立した思索の産物ではない。それは、現代の危機に応答し、世界中で同時多発的に生じている「価値の再定義」という知的潮流と深く共鳴するものである。これらの探求は個別に散在しているのではなく、相互に関連し合いながら、より公正で持続可能な未来への道を照らす、4つの主要な領域へと収斂しつつある。

1. 経済パラダイムの転換：成長至上主義を超えて：

第一に、経済成長そのものの意味を問い直し、新たな経済システムを模索する動きである。GDPに代わる豊かさの指標を模索する「Beyond GDP¹⁵⁾」の潮流を筆頭に、株主だけでなく全ての利害関係者を重視する「ステークホルダー資本主義¹⁶⁾」は、企業の目的を問い直す。さらに、ケイト・ラワースが提唱した「ドーナツ経済学¹⁷⁾」は、地球環境の限界と社会的な公正の双方を満たす経済圏を構想し、「脱成長¹⁸⁾」は持続可能性のために経済成長からの脱却をラディカルに提唱する。これらは従来の成長至上主義への根源的な挑戦と言える。

2. 人間開発と幸福の再定義：豊かさの本質を問う：

第二に、豊かさの源泉を、物質的な所有から人間の内面的な充足や潜在能力へと転換する

動きである。アマルティア・センの「ケイパビリティ・アプローチ¹⁹」は、人が「何をでき、何になれるか」という可能性に光を当て、その理論的基盤を築いた。この思想は、「世界幸福度調査²⁰」や、身体的・精神的・社会的な良好な状態を包括的に捉える「ウェルビーイング²¹」の探求といった実践的な試みへと繋がり、人間の尊厳を社会の中心に据え直そうとしている。近年国際的にも注目を集める日本由来の「生きがい (ikigai) ²²」という概念もまた、この潮流に連なるものであり、単なる幸福感だけでなく、人生の目的や意味、社会的な役割といった要素を統合的に捉えることで、人間の尊厳を社会の中心に据え直そうとする探求に、重要な視点を提供している。

3. グローバルな正義と共生の哲学：相互依存性の再認識：

第三に、西洋近代の個人主義とは異なる世界観を提示し、地球規模での共生を目指す動きである。南アフリカの「Ubuntu (ウブントウ) ²³」や南米の「Buen Vivir (ブエン・ビビール) ²⁴」は、人間の深い相互依存性や自然との調和を説き、注目を集める。これらの思想は、歴史的な権力構造を問う「ポストコロニアリズム²⁵」の視点や、共有資源を共同管理する「コモンズ²⁶」の理念とも響き合い、新たな社会のあり方を示唆している。

4. 存在論的転回と価値の再統合：

第四に、そして最も根源的な領域として、これらの社会経済思想の背後にある哲学的な問い直しが挙げられる。マルクス・ガブリエルらの「新実在論²⁷」に代表される潮流は、事実と価値を分離した近代の思考様式そのものを批判的に乗り越えようとする。この動きは、経済活動と倫理の再統合を目指す「倫理資本主義²⁸」に哲学的な土台を与え、我々がどのような世界に生きたいのかという規範的な問いを、再び思考の中心に据えるものである。

5.3. 価値観・世界観の転換の一例：WE ターン

これらの世界的な潮流に応え、価値観を根本から書き換えるための具体的な構想の一例として、本稿では京都哲学研究所 (KIP) の代表理事である出口康夫が東アジアの伝統的価値観を踏まえつつ構築した新たな哲学体系を紹介する (Deguchi, 2023, 2025, Forthcoming)。

その思考の旅は、一つの根源的な事実の認識から始まる。すなわち、いかなる人間も、自分一人では何もできない、ということだ。話す、歩く、食べるといったごく日常的な行為でさえ、他者、道具、自然、社会の支えなしには成り立たない。この「**単独では何もできない**」という「**根源的できなさ**」こそ、我々が共有する、最も本質的な姿であると出口は指摘する。

であるならば、我々の行為を真に遂行している主体とは、一体何であろうか。それは「私」という個人を超え、他者、道具、自然、社会システム、そして AI といった人間・非人間を含む多様な存在 (エージェント) が織りなす、相互依存のネットワークそのものである。この「**マルチ・エージェント・システム**」こそが、行為が繰り広げられる真の舞台であり、その真の主体に他ならない。

この認識は、我々の自己理解に革命をもたらす。「行為する主体」の正体とは、この相互依存のネットワーク全体、すなわち「われわれ(WE)」なのである。個人としての「私」は、そのネットワークの重要な一部ではあるが、全てではない。「自己」の正体は、実は「われわれ」だったのである。これこそが、出口が提示する新しい自己の姿、「われわれとしての自己(Self-as-WE)*」である。

自己の捉え方が「私」から「われわれ」へと変わるとき、世界のすべてが異なった観点から捉えられる。自由、責任、幸福といったあらゆる価値は、もはや「私のもの」ではなく「われわれのもの」となる。これは、社会の根底にある価値観・世界観(C レベル)を根本から書き換えるパラダイムシフトであり、出口はこの転換を「WE ターン*」と呼ぶ。

この新しい世界観は、具体的な社会のあり方(B レベル・A レベル)を劇的に変える可能性を秘めている。例えば、人間とAIとの関係性は、人間がAIを単なる「道具」として利用する「主人-奴隷モデル」から、人間とAIが「われわれ」を構成する対等な「仲間」として協働する「フェロシップモデル*」へと転換される。この新たな関係性を社会の基盤とし、それを支える法律、教育、組織のルールを再設計することで(B レベルの変革)、医療、研究、創造の現場で、これまで不可能だったレベルの価値を共創する(A レベルの変革)未来が開かれるだろう。

5.4. 「よいわれわれ」の条件と、分断を乗り越える原理：中空構造

しかし、「われわれ」を主体とすることは、新たな問いを提起する。「われわれ」が、その内的な多様性を抑圧し、均質化する全体主義的な「悪いわれわれ」へと変貌する危険はないのか。いかにして、その内なる多様性を尊重し、開かれた「よいわれわれ」を築くことができるのか。

この問いに対する出口の応答が、もう一つの中核概念、「中空構造*」である。それは、「よいわれわれ」が成立するための内的条件であり、かつ、分断の時代において多様な価値観が共存するための普遍的な構成原理でもある。

第一に、中空構造とは、特定の価値観や、個人、集団が、権力や利益の中心を恒久的に独占しない社会構造を指す。中心と周縁の非対称性を構造的に否定すること、それがこの哲学が目指す社会の姿である。

この思想は、絶対的な中心を否定し、権力構造を批判的に解体することに主眼を置いたポストモダンの「脱中心化」とは一線を画す。脱中心化がしばしば中心の「無化」というネガティブな帰結に終わったのに対し、中空構造は、よりポジティブで構成的な役割を「中心」に与える。

その核心には、一見するとパラドキシカルな構造が存在する。すなわち、「中心には何もない」という事実そのものが、逆に「われわれ」全体を結びつける最も重要な機能を果たす、という構造である。中心にある「空(くう)」は、特定の価値観や権力が占有することを拒む。この「不在」こそが、多様な価値観を持つすべての主体にとっての公平なアンカリングポイント(結び目)として機能する。何もないからこそ、誰もがそこに関わることができ、その「空」を共有の参照点とすることで、初めて

創造的な対話と協力の「場」が生まれるのである。

したがって、「中空構造」は、「WE ターン」という一つの価値提案の内部論理に留まらない。それは、「異なる価値観を持つわれわれは、いかにして対話し、共存できるのか」という、現代の分断に対する根源的な問いに答えるポテンシャルを持つ。

「WE ターン」が価値の主体を「私」から「われわれ」へと問い直す提案であるならば、「中空構造」は、その多様な主体が共存・共創するための、しなやかで力強い器（プラットフォーム）の提案なのである。

5.5 多様なブループリントの共創に向けて

このように、一つの哲学体系は、現代の課題に応答するための具体的なレンズと語彙を提供する。しかし、我々の真の挑戦は、この一例に留まることではない。むしろ、ここで示されたような**構想の「型」**を参考にしつつ、我々の探求は二つの方向に開かれなければならない。

第一に、全く異なる歴史的・文化的背景を持つ、**世界中の多様な知の伝統**へと、我々の視野を広げていくことである。すでに国際的な注目を集めている「ブエン・ビビール」や「ウブントウ」といった思想が示すように、世界には西洋近代とは異なる強力なオルタナティブが存在する。我々の課題は、そうした多様な思想から学び、対話し、さらには未だ十分に知られていない思想をも発掘し、現代的な文脈で**再創造**していくことにある。

第二に、そして同様に重要なのは、過去の伝統を参照するだけでは乗り越えられない、現代特有の課題（例えば AI との共生や地球環境の危機）に応答するための、**全く新しい価値や物語を構想し、創造**していく営みである。

我々の描き出す未来は、この「**知の伝統の再創造**」と「**未来の価値の創造**」という二つの営みが、互いに刺激し合い、対話することで初めて、その真の豊かさを実現するのである。

¹⁵ Beyond GDP: 一国の経済規模や社会の進歩を、国内総生産（GDP）という単一の経済指標のみで測ることの限界を指摘し、環境の持続可能性、健康、格差、主観的幸福といった、より多面的な指標を用いて「真の豊かさ」や「福祉（ウェルビーイング）」を評価・可視化しようとする、国際的な政策的・学術的潮流の総称である。2007年に欧州委員会などが主催した同名の国際会議を契機にこの名称が広く使われるようになり、OECD の「より良い暮らし指標（Better Life Index）」や、スティグリッツ委員会報告書などがこの潮流を代表する具体的な取り組みである（Stiglitz ほか、2009）。

¹⁶ ステークホルダー資本主義（Stakeholder Capitalism）: 企業の目的を、株主価値の最大化のみに置く「株主資本主義」と対比し、より広範な利害関係者（ステークホルダー）の利益とウェルビーイングを企業統治の中核に据えるべきだとする立場である。この思想は、R・エドワード・フリーマンが提唱したステークホルダー理論を経営理念として発展させたものであり（Freeman, 1984）、近年の格差拡大や環境問題への意識の高まりを背景に、世界経済フォーラム（WEF）のクラウス・シュワブ会長が強力に推進し、世界的な潮流となった（Schwab & Vanham, 2021）。

¹⁷ ドーナツ経済学 (Doughnut Economics): 英国の経済学者ケイト・ラワースが 2012 年に提唱した、21 世紀の新たな経済羅針盤となる概念モデル(Raworth, 2017)。人類が誰一人取り残されずに繁栄するために不可欠な「社会的基礎(食料、水、教育、公正など)」を内側の円で、地球の生命維持システムを不安定化させないための環境的上限である「プラネタリー・バウンダリー」を外側の円で描き、その二つの円に挟まれたドーナツ状の「安全で公正な領域」の中に、人類の経済活動を収めるべきだと提案する。

¹⁸ 脱成長 (Degrowth): 地球の資源制約と生態系の限界を踏まえ、GDP に代表されるような経済の量的成長への依存から計画的かつ民主的に脱却し、生活の質、公平性、生態系の持続可能性を優先する社会経済システムへと移行することを目指す、ラディカルな思想・社会運動である(Hickel ほか, 2022; Saito, 2023)。単なる景気後退やマイナス成長(=不況)とは異なり、豊かさそのものを再定義し、生産と消費の規模を縮小しながら、より公正で持続可能な社会を構想する点を特徴とする。

¹⁹ ケイパビリティ・アプローチ (Capability Approach): 人々の幸福や貧困、社会の発展を評価する際に、人々が保有する所得や資源の量ではなく、その人が「何をすることができ、どのような存在であることができるか(What a person is able to do or be)」という、個人の実質的な自由や可能性の集合(ケイパビリティ)に着目する規範的な評価枠組みである。ノーベル経済学賞受賞者である経済学者のアマルティア・センによって創始され、哲学者マーサ・ヌスバウムらによって発展させられた(Nussbaum, 2011; A. Sen, 1999)。国連開発計画(UNDP)の人間開発指数(HDI)の理論的基盤となるなど、国際開発や公共政策の分野に大きな影響を与えている。

²⁰ 世界幸福度調査 (World Happiness Report): 国連の「持続可能な開発ソリューション・ネットワーク(SDSN)」が発行する年次報告書で、各国の幸福度を国際比較する影響力の大きい調査である。人々の主観的な幸福感(人生評価)を基にしつつ、一人当たり GDP、社会的支援、健康寿命、人生の選択の自由度、寛容さ、腐敗の認識といった多角的な要因を用いてその背景を分析する。GDP を中心とした経済指標だけでなく、ウェルビーイングを直接測定しようとする「Beyond GDP」の潮流を代表する実践例の一つである。

²¹ ウェルビーイング (Well-being): 健康(身体的)、幸福(心理的)、良好な人間関係(社会的)といった、多面的な領域における「良い状態」を統合的に指す概念(Huppert ほか, 2007)。単に病気や不幸がないという状態(ill-being の不在)を超え、個人が自らの潜在能力を十分に発揮し、満足度の高い、意味のある人生を送っている状態を包括的に捉える。近年、個人の幸福だけでなく、組織の生産性や社会の持続可能性と深く関連する概念として、政策(例:ニュージーランドのウェルビーイング予算)や企業経営(健康経営など)の分野で重要な目標として位置づけられている。

²² 生きがい: 日本語に由来する概念で、人生の目的や意味、存在理由を指す。近年は「ikigai」として国際的な注目を集め、特に欧米の幸福研究やウェルビーイング研究において重要な概念として研究されている(Mathews, 1996; 神谷美恵子, 2004)。国際的な文脈では、しばしば「情熱(passion)」「使命(mission)」「天職(vocation)」「職業(profession)」という四つの円が重なり合う交点として図示され、仕事と人生の意味を統合する概念として理解されている。しかし、日本の伝統的な生きがい概念は必ずしも職業に結びつくものではなく、より広く人生の充足感や社会とのつながりを含む包括的な概念であり、その国際的な解釈とは細やかな相違がある。

²³ Ubuntu (ウブントウ): 南アフリカのズールー語やコサ語に由来する言葉で、「私は、あなたや皆がいるから、私である(I am because we are)」と翻訳される、人間の深い相互依存性、共同体、思いやりを中核に据えた倫理思想・世界観である(Shutte, 2001; Metz, 2011)。個人の自律性や権利よりも、共同体における調和、共感、寛容、連帯といった価値を重視する。アパルトヘイト(人種隔離政策)後の南アフリカで、デズモンド・ツツ大主教らが国民和解と融和の精神的支柱としてこの理念を掲げたことで、世界的に知られるようになった(Tutu, 1999)。

²⁴ Buen Vivir (ブエン・ビビール): 「良く生きる」「素晴らしい人生」を意味するスペイン語で、南米アンデス地方のケチュア族などに代表される先住民の世界観や哲学に由来する社会理念である(Gudynas, 2011; Acosta, 2013)。西洋的な「発展」観、すなわち経済成長や物質的な豊かさを無制限に追求するのではなく、共同体の調和、自然との共生、文化の多様性、精神的な充足といった、より包括的で調和の取れた豊かさを目指す。この理念は、エクアドル(2008 年)とボリビア(2009 年)の憲法に、国家の指導原理として明記されたことで国際的に大き

な注目を集めた。

²⁵ ポストコロニアリズム (Postcolonialism): かつての植民地主義 (コロニアリズム) が、独立後の旧植民地社会だけでなく、旧宗主国社会にも残した、政治的、経済的、文化的な影響や権力構造を批判的に分析・検討する、広範な知的潮流である (Bhabha, 1994; Fanon ほか, 2005; Spivak, 2012)。文学批評家のエドワード・サイードが 1978 年に発表した『オリエンタリズム』がその代表的な仕事として知られ、西洋が「東洋 (オリент)」をいかに偏見に満ちた形で表象し、支配を正当化してきたかを暴いた (Said, 1978)。西洋中心的な知のあり方そのものを問い直し、抑圧されてきた非西洋の視点や声を復権させることを目指す。

²⁶ コモンズ (Commons): 、特定の共同体によって共有され、共同で管理・利用される資源と、その管理を支える社会的・文化的な制度や慣行の総体を指す。伝統的には牧草地、森林、漁場といった自然資源を指したが、現代では知識、学術研究、データ、ソフトウェア (オープンソースなど)、都市空間といった、人工的・文化的な資源も「デジタル・コモンズ」「ナレッジ・コモンズ」として活発に議論されている。政治経済学者エリノア・オストロムは、「共有地の悲劇」が必ずしも起こるわけではなく、共同体による自主的なルール設定と管理によってコモンズが持続可能に利用されうることを示し、2009 年にノーベル経済学賞を受賞した (Ostrom, 1990, 2010)。

²⁷ 新実在論 (New Realism): 世界を人間の精神や言語によって構成されるものと見なす「構築主義」的な哲学 (ポストモダニズムなど) の行き過ぎに反対し、人間の心から独立して存在する客観的な実在を再び肯定しようとする、21 世紀初頭の現代哲学の潮流である。ドイツのマルクス・ガブリエルやイタリアのマウリツィオ・フェラーリスらがその主要な提唱者として知られる (Ferraris, 2014; Gabriel, 2015, 2018)。特にガブリエルの立場は、物理的な対象だけでなく、意味、価値、規範といった領域にも独自の「実在性」を認める点に特徴があり、事実と価値を分離する近代的な二元論を乗り越えようと試みる。

²⁸ 倫理資本主義 (Ethical Capitalism): 自由市場のダイナミズムを認めつつも、その活動が倫理的な規範や社会的公正の原理と両立可能であり、またそうでなければならぬとする考え方である。アダム・スミスの『道徳感情論』に遡る思想的源流を持つが、近年、企業の社会的責任 (CSR) や ESG 投資 (環境・社会・ガバナンス) への関心の高まりと共に、再び注目を集めている。単なる慈善活動や法令遵守にとどまらず、倫理をビジネスモデルと企業戦略の中核に積極的に組み込むことを目指す。

第Ⅲ部：未来へのアジェンダ

目的と概要

構想から実践へ。第Ⅲ部では、これまでの分析と構想を、現実の社会変革に向けた具体的な行動指針として結実させる。ここでは、あらゆるセクターのリーダー、実践者、創造者、教育者、そして市民が共有すべき 4 つのアジェンダを提示する。これらは完成された「答え」ではなく、分断と変容の時代において、我々が共有しうる最も実践的かつ本質的な「開かれた問い」として機能する。

各章の概要

第 6 章「未来を構想するための 4 つのアジェンダ」：本稿の議論を実践に移すための具体的な行動指針を提示する。(1)「価値」の焦点化、(2)根源的な問いと実践の結合、(3)人文学の知の活用、(4)価値共創ネットワークの構築という 4 つのアジェンダを通じて、分断と変容の時代における社会変革の道筋を明確化する。これらは継続的な探求と実践のための指針として、読者の多様な文脈での応用を促す。

第6章：未来を構想するための4つのアジェンダ

これまでの議論を通じて、我々は、現代社会が直面する複雑な課題の根源に「価値」をめぐる問題が存在すること、そして、その構造を解き明かし、新たな未来を構想するための思考様式と、その実践を支える哲学・人文学の重要性を論じてきた。

分析や構想を、単なる思弁の遊戯で終わらせないために、我々は、本質的な社会変革を目指すすべてのリーダー、実践者、創造者、教育者、そして市民が共有すべき、具体的かつ本質的な行動指針（アジェンダ）を提示する。

4つのアジェンダ

1. 「価値」の焦点化 (Focus on Values) :

複雑な社会課題に直面した時、我々是对症療法的な解決策に飛びつきがちである。しかし、本質的な変革は、問題の根底にある「価値」そのものに焦点を当て、「我々は何を本当に重要と見なしているのか」を徹底的に問い直すことから始まる。短期的な利益か、長期的な持続可能性か。効率性か、人間の尊厳か。あらゆる戦略や行動計画の策定に先立ち、この根源的な価値への問いを、思考の中心に据えること。これが、すべてのアジェンダの土台となる。

2. 根源的な問いと実践の結合 (Unite Foundational Inquiry and Praxis) :

価値をめぐる根源的な問いは、それ単体では現実から遊離した思弁に陥る危険性を孕む。その問いを、現実の組織運営、技術開発、政策決定、そして教育プログラムや芸術作品の創造といった具体的な「実践 (Praxis)」のレベルと常に結びつけ、「潜行」と「浮上」の往還を繰り返すことが不可欠である。実践における具体的な課題は、価値を問うためのリアリティを与え、価値の探求は、実践をより本質的なレベルへと高める。本稿で提示した ABC モデルは、この「根源的な問い」と「実践」の創造的往還運動における、現状分析のための有効なフレームワークの一つである。

3. 人文学の知の活用 (Leverage the Humanities) :

この往還運動を知的に深化させ、豊かなものにするために、我々は人文学の知見を、単なる「教養」としてではなく、実践的な「思考の武器」として積極的に活用する。特に、価値を根源から問い直し、新たな規範を構想するための不可欠な知的技術として、哲学はその真価を発揮する。これは、これまで実践の現場から疎遠であったアカデミズムの知を、再び社会変革の最前線へと「再結合 (リカップリング)」させる試みでもある。

4. 価値共創ネットワーク*の構築 (Build a Value Co-creation Network):

最後に、価値をめぐる探求と実践は、決して個人や一組織の営みで完結するものではない。むしろ、その閉じた探求こそが、意図せざる価値の押し付けや、新たな分断を生み出す温床となりうる。セクターや国境、世代といったあらゆる境界を越えた多様な主体が協働し、対話し、試行錯誤するための「価値共創のネットワーク」を構築すること。それ自体が、分断と変容の時代において、希望ある未来を創造するための最も強力な運動体となる。

終章：価値多層社会というビジョンへ

本稿は、現代社会が直面する危機の根源に「価値」をめぐる問題が存在することを明らかにし、その構造的課題に対処するための思考のフレームワークを提示してきた。分析は、しかし、それ自体が目的ではない。我々は、分断と変容の時代を乗り越えるための、明確な方向性と希望あるビジョンを提示する責任を負っている。

そのビジョンとして我々が提示するものが「**価値多層社会 (Multilayered Society of Values)**」である。

これは、単一の価値観が支配するユートピアではなく、本稿で論じてきた、異なる価値観が社会に併存する「多元性」と、個々の主体が内面に抱える「多層性」とを、問題ではなく、社会の豊かさの源泉として捉え直す社会モデルである。それは、異なる価値観の共存を認め、それらの間の対話を促し、時には緊張関係の中から新たな価値を創造していく、動的で創造的な社会のあり方を指す。

この社会は、静的な理想状態として存在するのではなく、以下の三つの永続的な営みを通じて実現される。

1. **内省的実践:** あらゆる組織や個人が、自らの行動の根底にある価値観 (Core) を常に問い直し、内なる価値の多層性と向き合う。
2. **対話的共創:** 異なる価値観を持つ他者との対話を通じて、相互理解を深め、共有可能な目標や規範・制度 (Bridge) を共に築き上げる。
3. **創造的変革:** 価値の衝突や葛藤を、破壊的な分断ではなく、新たな実践 (Action) を生み出すための創造的エネルギーへと転換する。

価値多層社会の実現は、一部のリーダーや専門家によって成し遂げられるものではない。それは、本稿で提示した 4 つのアジェンダを、自らの持ち場で実践する経営者、政策立案者、研究者、アーティスト、教育者、宗教家、そして行動する一人ひとりの市民の、自律的なネットワークによってこそ紡がれる。

そして、その先に見据えるべきは、こうした個々の価値探求のネットワークを、さらに相互に結びつけ、学び合うための「ネットワーク・オブ・ネットワーク (Network of Networks)」の構築である。世界各地で同時多発的に生まれている新しい価値を求める潮流を結集させ、地球規模での対話と共創を加速させること。それこそが、本稿が提示するビジョンを実現するための、極めて重要なアプローチとなるだろう。

本稿が、その壮大かつ不可欠な探求への、信頼できる第一歩となることを願う。

付録：用語集

概念名	英語表記	定義と解説	現代社会との関わり
価値多層社会	Multilayered Society of Values	価値観の多元性と多層性を社会の豊かさと捉え、対話と創造的な緊張を通じて動的に運営する社会ビジョン。個人の内面にも矛盾しうる価値の層（多層性）が存在することを前提とする。	グローバル化が進む一方で分断が深刻化する現代において、異なる価値観を持つ主体が共存・共創するための社会モデルとして提示される。
ABC モデル	ABC Model	社会課題を、目に見える Action（実践）と、その根底にある Core（価値観）、そして両者を媒介する Bridge の三つのレベルで構造的に分析するモデル。	表層的な問題解決が行き詰まりがちな複雑な社会課題（例：気候変動、経済格差）に対し、その深層構造を可視化し、本質的な変革を構想するための思考の足場となる。
潜行／浮上	Diving / Surfacing	表層の課題（Action）からその背景にある制度（Bridge）、さらに根底の価値観（Core）へと掘り下げる分析プロセス（潜行）と、見出された新たな価値観から未来の制度や実践を構想し直す創造的プロセス（浮上）の往還運動。	組織変革や政策立案において、現状分析（潜行）とビジョン構想（浮上）を往還することで、場当たりのでない、持続可能で本質的な変革のデザインを可能にする。

概念名	英語表記	定義と解説	現代社会との関わり
価値関係マトリックス	Value-Relation Matrix	ABC モデル（縦軸）に、多様な利害関係者（ステークホルダー）を横軸として掛け合わせ、「誰にとっての、どの層の価値」が対立／協調しているかを立体的に可視化する分析ツール。	複雑な利害が絡み合う社会課題において、価値の対立構造を客観的に把握し、全ての関係者にとって望ましい解決策（プラスサム）を模索するための対話の基盤を提供する。
われわれとしての自己	Self-as-WE	行為の主体を、孤立した「私」ではなく、他者・自然・道具・AI など人間・非人間を含む多様な存在が織りなす相互依存のネットワーク全体、すなわち「われわれ」として捉え直す自己観。	人間中心主義的な自己観が行き詰まりを見せる中で、環境問題や AI との共生といった課題に対し、人間と非人間を包括する新たな倫理観や責任のあり方を構想する基盤となる。
WE ターン	WE-turn	あらゆる思考と実践の基軸を、「私（I）」中心から「われわれ（We）」中心へと転換すべきだという規範的な価値提案。個人の幸福や権利も、「われわれ」全体の文脈の中で再定義される。	個人主義の深化が社会の分断や孤立を招いている現代において、共有された目的や共同性を再構築するための、オルタナティブな社会設計の指針として機能する。
中空構造	Chu-ku (Empty-	特定の権力や価値観が中心を恒久的に独占せず、「中心を空（くう）」としておくことで、誰もが公平に関与できる対話の「場」を生み	中央集権的なガバナンスが機能不全に陥る一方で、SNS などが新たな分断を生む

概念名	英語表記	定義と解説	現代社会との関わり
	Centered) Structure	出す設計原理。多様な価値観が共存するための統治理論でもある。	現代において、分散的で開かれた公共圏やプラットフォームを設計するための原理となる。
フェロシップモデル	Fellowship Model	AI を人間が一方向的に利用する「道具」と見なす「主人-奴隷モデル」のオルタナティブ。人間とAI が「われわれ」を構成する対等な「仲間（フェロー）」として、互いの能力を補い合いながら協働する関係性を社会の基盤として制度化しようとする構想。	AI が人間の知性を超えうるとされる時代において、AI との支配／被支配の関係ではない新たな共生関係を築き、人間の尊厳を再定義するための倫理的・社会的ビジョン。
価値共創ネットワーク	Value Co-creation Network	組織、セクター、国境、世代といった境界を越え、多様な主体が対話を通じて新たな価値を共に探求し、創造するための開かれた協働基盤（プラットフォーム）。	単一の組織や国家だけでは解決できない地球規模の課題に対し、集合知を活用し、継続的な学習と試行錯誤を通じて解決策を共創していくための社会的な仕組み。

参考文献

Acosta, A. (2013 年). *El Buen Vivir: Sumak Kawsay, una oportunidad para imaginar otro mundo*. Icaria editorial.

Bennis, W., & Nanus, B. (1985 年). *Leaders: The Strategies for Taking Charge*. Harper & Row.

Berlin, I., & Banville, J. (2013 年). *The Crooked Timber of Humanity: Chapters in the History of Ideas - Second Edition* (H. Hardy, 編). Princeton University Press.

Berlin, S., Isaiah. (2025 年). 自由論 (小川晃一, 小池銑, 福田歆一, & 生松敬三, 訳). みすず書房.

Bhabha, H. K. (1994 年). *The Location of Culture*. Routledge.

Cascio, J. (2020 年, 4 月 29). Facing the Age of Chaos. *Medium*.

<https://medium.com/@cascio/facing-the-age-of-chaos-b00687b1f51d>

Chang, R. (編). (1997 年). *Incommensurability, Incomparability, and Practical Reason*. Harvard University Press.

Deguchi, Y. (2023 年). From Incapability to We-Turn. A. Zwitter & T. Dome (編), *Meta-Science: Towards a Science of Meaning and Complex Solution* (pp. 41–70).

University of Groningen Press.

Deguchi, Y. (2025 年). The WE-turn of Value: Principles. *The Journal of Philosophical Studies*, 614, 1–43.

Deguchi, Y. (Forthcoming 年). The WE-turn of Action: Principles. *Open Philosophy*.

Fanon, F., Bhabha, H. K., & Sartre, J.-P. (2005 年). *The Wretched of the Earth* (R. Philcox, 訳; Reprint). Grove Press.

Ferraris, M. (2014 年). *Manifesto of New Realism*. SUNY Press.

Freeman, R. E. (1984 年). *Strategic Management: A Stakeholder Approach*. Pitman.

Gabriel, M. (2015 年). *Fields of Sense: A New Realist Ontology*. Edinburgh University Press.

Gabriel, M. (2018 年). なぜ世界は存在しないのか (清水一浩, 訳). 講談社.

Gabriel, M., Horn, C., Katsman, A., Krull, W., & Lippold, A. L. (2023 年). *Towards a New Enlightenment: The Case for Future-oriented Humanities*. Transcript Verlag.

Gudynas, E. (2011 年). Buen Vivir: Today's Tomorrow. *Development*, 54(4), 441–447.

- Harari, Y. N. (2022 年). ホモ・デウス: テクノロジーとサピエンスの未来 (柴田裕之, 訳). 河出書房新社.
- Hickel, J., Klu, K., & Read, R. (2022 年). *Less Is More: How Degrowth Will Save the World*. Windmill Books.
- Huntington, S. P. (2017 年). 文明の衝突 (鈴木主税, 訳). 集英社.
- Huppert, F., Baylis, N., & Keverne, B. (編). (2007 年). *The Science of Well-Being*. Oxford University Press.
- Kern, A.-B., & Morin, E. (1993 年). *Terre-Patrie*. SEUIL.
- Kuhn, T. S. (with Hacking, I.). (2023 年). 科学革命の構造 (青木薫, 訳; 新版). みすず書房.
- Land, N., Mackay, R., & Brassier, R. (2012 年). *Fanged Noumena: Collected Writings 1987-2007*. Urbanomic / Sequence Press.
- Lyotard J. F. (1986 年). ポスト・モダンの条件: 知・社会・言語ゲーム (小林康夫, 訳). 書肆風の薔薇, 星雲社 (発売). <https://ci.nii.ac.jp/ncid/BN00618530>
- Mackey, R. H. (1992 年). *Translating Vision Into Reality: The Role of the Strategic Leader*. U.S. Army War College.

- Mathews, G. (1996 年). *What Makes Life Worth Living?: How Japanese and Americans Make Sense of Their Worlds*. University of California Press.
- Meadows, D. H. (2015 年). 世界はシステムで動く: いま起きていることの本質をつかむ考え方 (枝廣淳子 & 小田理一郎, 訳). 英治出版.
- Metz, T. (2011 年). Ubuntu as a Moral Theory and Human Rights in South Africa. *African Human Rights Law Journal*, 11(2), 532–559.
- Neumann, J. V., Morgenstern, O., Kuhn, H. W., & Rubinstein, A. (2007 年). *Theory of Games and Economic Behavior* (Anniversary). Princeton Univ Pr.
- Norris, P., & Inglehart, R. (2019 年). *Cultural Backlash: Trump, Brexit, and Authoritarian Populism*. Cambridge University Press.
- Nussbaum, M. C. (2011 年). *Creating Capabilities: The Human Development Approach*. Harvard University Press.
- Nussbaum, M. C. (2013 年). *Creating Capabilities: The Human Development Approach* (Reprint). Belknap Press: An Imprint of Harvard University Press.
- Nussbaum, M. C. (2016 年). *Not for Profit: Why Democracy Needs the Humanities* (Reprint). Princeton Univ Pr.

Ostrom, E. (1990 年). *Governing the Commons: The Evolution of Institutions for Collective Action*. Cambridge University Press.

Ostrom, E. (2010 年). Beyond Markets and States: Polycentric Governance of Complex Economic Systems. *American Economic Review*, 100(3), 641–672.

Raworth, K. (2017 年). *Doughnut Economics: Seven Ways to Think Like a 21st-Century Economist*. Random House Business.

Raz, J. (1986 年). *The Morality of Freedom*. Oxford University Press.

Russell, S. (2019 年). *Human Compatible: Artificial Intelligence and the Problem of Control*. Viking.

Said, E. W. (1978 年). *Orientalism*. Pantheon.

Saito, K. (2023 年). *Marx in the Anthropocene: Towards the Idea of Degrowth Communism*. Cambridge University Press.

Scharmer, C. O., 中土井僚, & 由佐美加子. (2010 年). U 理論: 過去や偏見にとらわれず、本当に必要な「変化」を生み出す技術. 英治出版.

Schwab, K., & Vanham, P. (2021 年). *Stakeholder Capitalism: A Global Economy that Works for Progress, People and Planet*. Wiley.

Sen, A. (1999 年). *Development as Freedom*. Oxford University Press.

Sen, A. K. (2007 年). *Identity And Violence: The Illusion of Destiny* (Reprint). W W Norton & Co Inc.

Senge, P. M. (2011 年). 学習する組織: システム思考で未来を創造する (枝廣淳子, 小田理一郎, & 中小路佳代子, 訳). 英治出版.

Shutte, A. (2001 年). *Ubuntu: An Ethic for a New South Africa*. Cluster Publications.

Spivak, G. C. (2012 年). サバルタンは語ることができるか (上村忠男, 訳; 第 1 版第 11 刷). みすず書房.

Stiglitz, P. J. E., Sen, P. A., & Fitoussi, P. J.-P. (2009 年). *Report by the Commission on the Measurement of Economic Performance and Social Progress*.

Taylor, C. (1994 年). *Multiculturalism: Examining the Politics of Recognition*. Princeton University Press.

Taylor, C. (2010 年). 自我の源泉: 近代的アイデンティティの形成 (下川潔, 桜井徹, & 田中智彦, 訳). 名古屋大学出版会.

Tooze, A. (2019 年). *Crashed: How a Decade of Financial Crises Changed the World*. Viking.

Tooze, A. (2021 年). *Shutdown: How Covid Shook the World's Economy*. Viking.

Tutu, D. (1999 年). *No Future Without Forgiveness*. Doubleday.

神谷美恵子. (2004 年). *生きがいについて*. みすず書房.